

---

---

京都国立博物館蔵「阿国歌舞伎図屏風」に描かれた人々

---

---

京都国立博物館蔵「阿国歌舞伎図」(六曲一隻、重文)は、初期の阿国歌舞伎の様子を描いた作品として重要な資料である。舞台上では、阿国歌舞伎の代表的演目である「かぶき者」が茶屋の女主人「茶屋のかか」に戯れかかる「茶屋あそび」が演じられているとされる。棧敷には「秀吉らしき家族連れ」が座り、画風は、特に樹木の描き方や人物の姿態や配置などから長谷川派の絵師と考えられている。制作年代は、慶長期中頃から末期とする意見が多い。

これまで、原初的歌舞伎を知る上で重要な作品であることが強調されてはいるが、登場人物についての詳細や、鑑賞者、作品の制作背景などは語られることがなかった。本発表では、小屋の外と芝居席の人々の配置、阿国の芸態、棧敷席の人物の同定を通して、鑑賞者及び鑑賞の仕方、制作背景、注文主、制作年代を考察する。

まず、阿国歌舞伎を見物する観客と小屋の外にいる人々の配置を検討し、他の阿国歌舞伎図との比較を通して、本図の人物構成の特徴を明らかにする。他の作品では、観客は歌舞伎に夢中になる一群として描かれることが多いが、本図は当時の遊興地に見られる様々な階層の人物を、重複しないようカタログ的に配置する工夫がなされており、本図の鑑賞者が遊興地に集う諸風俗を識別しやすくするという特徴が見出せた。

次に、「茶屋あそび」の演目について考察する。阿国の芸態の変遷を研究された小笠原恭子氏によると、出光美術館蔵「阿国歌舞伎図屏風」(六曲一双)に描かれる男髻に覆面、小袖に袖無し胴服を重ね、大刀脇差を差す形が阿国デビュー当時のものと考えられる。本図の髻を結わず捌き髪で、覆面を着用せず、刀をかつぐスタイルの「かぶき者」は、阿国の芸態の中でいかなる位置を占めるものであるのか究明したい。

最後に、棧敷席の見物人物について考察する。二つ描かれる棧敷のうち、向かって左の棧敷には秀吉らしき男が座るとされるが、同席する他の人物達についてはこれまで言及されていない。時の権力者秀吉とみられる男の隣、棧敷の中央に位置する場所には喝食姿の少女が座る。この少女ともう一つの棧敷に座る尼姿の女性を中心に、棧敷内の人物を同定することによって、本図の鑑賞者は後陽成天皇の女御である近衛前子と推測する。すると、先述した小屋の内外の人物モチーフの配置の意味や、鑑賞目的(制作背景)、鑑賞の仕方、注文主が推定され、制作年代を慶長13年(1608)頃と判断するに至った。

以上の考察から本図が、原初的歌舞伎を描き残すことが主な目的なのではなく、その支持者や支持者たちの鑑賞状況などを伝える貴重な資料として新たな研究的側面を持つことを指摘したい。